

の
会
美紗

た よ り

ブルーの背中を永遠に

西松 布咏

今年も最後の暦になつたというのにまだ晚秋の小春日和が続いている。

お蔭で私は北園克衛の絶筆「ブルー」の最後のフレーズである「今去つてゆく秋のブルーの風のなかにて：」の繰返しのなかにいた。

実相寺での二月公演に続き十一月二十六日、大阪・山本能楽堂での「貞女の夢・夢 文楽×江戸唄リミックス」公演を終えた。文楽の本場ゆえと私の芸の未熟さゆえか東の粋「いき」と西の粋「すい」の息がずれていたとのご指摘を受けた。累々と時を重ねて確立されていった様式をリミックスしても原曲より良くなるはずはないし、義太夫の太棹に江戸唄の中棹が太刀打ちできないことは承知していた。

でも・人形の佇まいに潜む女心を女の声で表現してみたかった。特に八年前に馬場あき子氏の詞を創作邦楽として作曲した「橋姫」は、様々な共演者と繰返し「怨みながら恋しやー」と心の奥底をえぐるように唄つてきたが、その想いを享受していただくにはこれからも永遠の時間が必要だろう。

大阪に続き岐阜の出稽古を終えて帰宅すると、ずりと重い書籍が届いていた。

ジョン・ソルト氏の「北園克衛の詩と詩学——意味のタペストリーを裁断する」の翻訳本が二十五年もの年月を経てようやく完結したのだ。カルフォルニア大

学の恩師であつたケネス・レクスロスを通して北園克衛の存在を知り周囲の反対意見をものともせず、まったく面識のない日本の詩人をハーバード大学の博士論文のテーマに選び、爾来「世界的に評価されている北園さんを日本人が知らないのはおかしい！」と多大な労力をかけての研究に対する氏の情熱と私財を投じたコレクションを掲載したページの重さに胸を熱くした。

今年は長年に亘る熱心な交渉が実を結び、北園兄弟の生誕地である伊勢市朝熊にほど近い三重美術館と砧公園内の世田谷美術館の二箇所で「橋本平八と北園克衛展」も長期間開催された。

黄金色の光がまぶしく溢れる十月二十四日。森に併む世田谷美術館ホールでジョン・ソルト氏と翻訳者の田口哲也氏による講演会+パフォーマンスが開かれ、私は舞踏家の大野慶人氏と古典曲とショールな言葉を三味線に乗せた創作曲で「北園克衛の世界」を共演した。ソルト氏は浅川マキや大野一雄・慶人を初めとする多くの日本人を世界に紹介したが、私が邦楽家としてアメリカ・ヨーロッパ公演へと活動を進展できたのも、当時氏が在籍していた北米のアムハースト大学で、私の公演を企画してくれたことがきっかけであった。

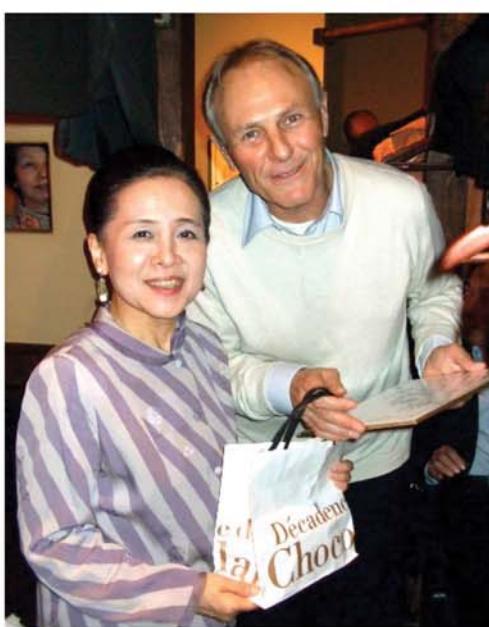
そして古典音楽の狭い籠の中でもがいていた私を見かねて斬新なデザインによるCDの制作を促してくれたり、三味線音樂も世界の音樂の一つなのだからもっと広い視野で考えたら?と現代詩を作曲することや他のジャンルのアーティスト達と交流してゆく「ニユアンスの会」を提案してくれた。

その摸索のなかで、やがて北園克衛の「ブルー」や「黒い肖像」の曲が生まれ、生きてゆく心の叫びを三味線と共に世界や日本の各地で繰返し演奏することになつてゆく。

ソルト氏は前衛であるとは歴史や従来の形式にどうわらない勇気を持つて行動出来るかどうかだと講演会

でも語つていたが、多岐に涉る北園克衛の研究も根底に源氏物語や西鶴文学といった古典への造詣の深さと理解があつたからこそ、現代にその情熱を繋げて詩人・日本文学研究家としてさらに新しい表現世界の追求へと展開していくのだろう。

私もささやかな夢がある。三味線音樂を現代人の心に響かせてゆきたいという・・・。



美紗の会は様々なジャンルで活躍している会員とこうした思いで楽しく稽古を続けているが、この秋は悲しい別れがあった。

「美紗の会のつどい」のたびに素晴らしい音響と映像のDVDを制作して下さり、飘々とした穏やかで優しい人柄で慕われていた百瀬靖彦氏が十一月八日急逝された。十数年前に「商船三井の先輩から申し渡されたので・・・」と困惑した様子で入門され小唄の稽古を続けていたが、ある時眼を真っ赤にして「病で亡くなりた娘の供養をしながら打ち込むものが欲しいので三味線を教えて下さい」と七十の手習いを始め、二人三脚でそれは大変な稽古を繰返した。この頃少し唄と三味線の間のズレが身に付いてきたかしら・・・という矢

先の訃報であつた。長年の勤めをようやく終え、悠々自適の人生をどう喰つて下さるだろうか・・・と私も楽しみにしていただけになんとも残念でならない。

でも最愛のお嬢さんに天国で遭い、きっと得意気に三味線を聞かせているでしょう・・・とその背中を見つめ続けて行きたいと思っている。

ソルト氏は離日前の電話で「この展覧会が終わつたら世界中の誰でもが、いつでも北園作品を観られるようにインターネット上で公開してゆくつもりです」と語つていた。



北園克衛の世界をこれからもっともっと拡げたい・ブルーの瞳の奥に今なお燃えるブルーの背中をもいつまでも見つめて行きたい。

「東京弁せつたいしゃべつたらあかんで」。戻つてこない。待ちくたびれて、関西弁を捨てたかどうかを確かめることのないまま。そして。さようなら。

いい男は東京に持つていかかる。わたしはその頃京都に住んでいて、その人も京都に居た。わたしは自分のギターを渡した。わたしだと思って毎晩抱えてくれとは言わなが、忙しくてもギター弾くよね?と。古いクラシックギター。そのギターを渡した喫茶店もうなくなってしまった。

新幹線のホームで見送る。発車間際に、男は唯一バッ

グに入れず首にかけていた大きなヘッドフォンを無造作に差し出した。耳にあたるクッション部分がすでに剥げて、音楽を聴くたびに黒いものがぽろぽろ落ちて、耳だけではなく服にもくつきそうだ。「いつたい何年間このヘッドフォンで聴いてたん?」いつまでもわたしはあなたの大切な音でありたい。

秋の世田谷美術館「橋本平八と北園克衛展」。わたしは言葉と衣服のアナロジーについて研究している

が、モダニズムを軽やかに着たり、ときには心地悪そうに脱いだふりをしながら、言葉という衣装を現代(わたし)に落として残してくれた北園克衛と人の大ファンであり、またその作品は研究対象でもある。といつても論文はまだ一本も完成していない。書きかけのものはあるのだけれど…。そんな心もとない気持で東京へ行く。ひさしぶりだった。用賀で降るのははじめでだった。

西松布咏さんの北園克衛詩の演奏は、わたしが語らずとも定評があるに違いない。わたしには、演奏を聞く機会がある度に、まったくはじめて聴いた気になる。氣というか体というか。何回聴いても飽きない。退屈にならない。おいでとは一言も言わないのに、両腕でわたしを招いている動作。一音はじまると一步こちらに近づいて、ゆっくりと音の腕がすっと伸びて、進ん

東京がキレイ。とよく人に話す。これまで好きになつた男が次々に日本国を中心であるその場所へ労働力として連れて行かれてしまうから。わたしは送り出す。

黒い肖像

小野原 教子



田口哲也さんとジョンソルトさんの講演は、もつたないくらい充実した内容で、耳の聞こえない人のための手話解説が付いていた。その講演と演奏の前に、わたしは駆け足で展示を見たが、北園克衛の兄の橋本平八のうさぎの作品は印象的だった。なんだか大きさに違和感があつて。大きいとか小さいとかじゃない。奇妙なバランスでそこに居る。そんな感じ。そのうさぎ作品のオマージュも表現された大野慶人さんの舞踊は、決して大きくはないステージのなかで、どんどんふくらんでいく風船のような空間を作る。とても静かに。そして布咏さんの声と弦の作るエネルギーでどんどん熱せられていく。音で内壁がなぞられる?ちがう。そこには壁がない。枠(フレーム)はあってもそれは窓になつていて、つねに往来できて、揺れ動いている。自由に跳ねた。耳。

『黒い肖像』を演じる布咏さんは、ジミニ・ヘンドリックスみたいだった。そんな風に書くと失礼だと思われる読者の方もおられるかも知れないが、わたしにはロックススターのように格好がよかつた。色っぽいのに男前で、しなやかなのに鋭利なミュージシャン。邦楽とか洋楽とか、ギターとか三味線とか、そういう物の名前を飛び越して、うらやましいくらい自由に、けれど力強い形から高いエネルギーがあふれていた。わたしは動かされる。動かされないまま。動けない。耳は音の熱でうごめいて、心はずつと揺さぶられづける。展覧会の招待券を送つてくださった方がいたのに、郵便物はわけあって送り返されていて、受付で入場券を購入しようとしていると背の高い外国人の方がチケットをゆずつてくださった。前夜は慣れない東京の乗り物で乗るべき電車とは逆方向に乗つてしまい、終電に乗り遅れホテルまでタクシーを利用したが、運転手の方も道に迷つて到着まで時間がかかったと言つて、料金を請求されなかつた。東京という都もまんざらでもないなあ。なにしろあんなにクールな音楽家がいる。絶望、火酒、紫、髭：『黒い肖像』の一言目から、夭折のギタリストはそこにいたのか。用賀で働いているはずのあなたは元気にしているだろうか。

月に憑かれて・魅せられて

高橋 枝里子



常から離れた空間でした。
そなちよつとした非日常空間・軽井沢で毎年行われ、今回で第三回を迎えるという「薊の会」。この春に入口したばかりの私にとっては初めて参加する会です。三味線と尺八、朗読のコラボを聴くのも初めての体験。事前に「とても雰囲気の良い所よ」と伺っていたこともあり、どのような所なのか、どのような空間であるのか……想像してとても楽しみにしていました。

会場の鶴間邸に着くと、森の香りに包まれた黒くモダンなデザインの別荘の中、広いリビングから続いている和室に和蠟燭が灯されステージになつていきました。街の喧騒からは遙か遠く、辺りは秋の虫の声が聞こえるのみの静寂な気配の中で始まつたプログラムは、「月に憑かれて・魅せられて」というお題。

夜空を照らす光と満ち欠けの神秘で、古来より人々を魅了し、多く芸術の題材となつてきました月。その月に因んだ唄・曲・エッセイを、第一部は西松布咏師匠、尺八奏者の小林静純さん、そして俳優の寺田農さんがそれぞれお一人ずつ演奏・朗読されました。

休憩を挟んで第二部はお一方ずつの「コラボ、「異ジャンルとの協演」。三味線と尺八、尺八と詩の朗読、唄と語りのコラボはそれぞれに異ジャンルという言葉の「異」の字が異なるほどに、絶妙に合わさっています。そして演奏会終了後の場で、今回初めて、師匠の演奏を聞かれた方とお話しして、いた時に伺つた『演奏している時は圧倒的な存在感で、とても大きく感じられて……今立つていらっしゃる小柄な姿とは、まるで別人のようでした』という感想に、思わず同感です！……と。舞台の上の師匠は、とても大きい存在で、今まで邦楽にあまり触れてこなかつた自分のようなものにも、「凄い」と感じさせる力がある。その事を再確認致しました。

演奏中も、その後の会の間も残念ながら曇りで、月の姿を確認することはできませんでしたが、その後の会中の余興で、秋の夜風にくるくる回つて満ち欠ける紙のお月様のお月見をすることができました。

本物の月の光こそ目にできませんでしたが、月は太陽の光を受けて輝くだけでなく、それ自体が引力を持つ私たちの住まう地球と引き合つていています。

その見えない力で、海の潮の満ち引き、更には人間の体内の水や精神にまで影響を与えていたとか。

眼に見えなくとも強い引力をもつて人に影響を与えるのは、芸の力も同じかもしません。

天空の月は見えずとも……地上の月に魅せられた一日でした。

荒野を渡る風のような、無常を感じさせる尺八の音色。時折冗談も交えつつ、楽しい雰囲気で語られた天

文エッセイ。そして師匠のしつとりとした唄と三味線。中でも歌沢の「お月さん」が、「闇の夜もあるぞえ」

という詞が、人の心のこともあらわしているようで……好き、と仰っていた師匠の解説の言葉とともに、印象に残りました。

なつたとき百瀬君が通信機の電源をオフにしてこなつたので一度帰船してからという。彼らの車で帰船すると、荷役が順調に進み出航時間が早まつたといつ。美人に会いに行ついたら危うく乗り遅れるといひであつた。この他にも感激したこと、危うかつたこと、いろいろ今でも懐かしく想い出す。

時は移り、お互い東京に住むようになり、また一緒に飲みに行くようになった。彼の酒は本当に楽しい良い酒だつた。酒場での十八番は『霧の摩周湖』、彼が歌うのをよく聞いた。

一方、私は昭和四十七年から胡美紗さん（西松布咏師匠）に小唄を習い始めていた。その後美紗の会が結成され、百瀬君にも入会を勧めた。

彼は、平成十年に入会し、早くも同年十月の「第十六回美紗の会のつどい」で初舞台を踏む。そして、四年後の会では三味線でも出演するようになつた。彼は低音の良く響く声を持つており唄は上手かつたが、三味線も通信士らしくリズムの刻みが正確だつた。

彼は電気通信の深い知識を有しており、「美紗の会のつどい」他では、カメラやビデオ撮影係をずっと務めてくれた。どんな会場でも厭わず重たい三脚他の機材を担いで参加し、ビデオやCDを制作してくれた。最近では、十万円もする映像編集ソフトを購入し、時間と労力をかけて、素晴らしいDVDを会員のために提供していた。

彼はメ力に強く無類の音楽好きであり、PCM録音によるモーツアルトの全曲が放送されるなどを知るや否や自宅に専用のアンテナを設置しエアチェックを行つていたことも想い出す。

百瀬君半世紀余りの温かい交友がありがとう。本当に世話になりました。きっと今頃は娘さんに三味線の弾き唄りで『味』を聞かせているにじだらう・・・。

電 通 大 を 卒 業 し 昭 和 三十三 年 に 私 の 二 年 後 輩 と し て 三 井 船 舶 に 入 社 し た 。

彼との最初の出会いは昭和三十五年、吉野山丸での中南米への処女航海だつた。彼は通信士、私は事務員として、この航海に引き続き北米、ヨーロッパ航路と、私が昭和三十六年に陸上勤務となるまでの間、二航海八ヶ月余り寝食を共にした。彼とは様々な寄港地で行動を共にしたが、カラカスでは、数人の将校と意気投

百瀬君を偲ぶ

嘉本 範男



『今後の公演予定』

●平成二十三年一月一十九日(土)午後六時開演

第五回 江戸唄と落語を楽しむ会

江戸・夕夢嘶(えどのゆうべはかなばなし)
唄と三味線

吉村 ゆかり
舞 嘴

●平成二十三年二月二日(水)午後六時半開演

グランードアーケ半蔵門

第三回 薦くらぶ 春を彩る

西松布咏の唄と三味線

西松布咏

春風亭正朝

第七回 純麗会のつどい

粹麗会一門唄い初めと新年会

西松布咏

寺田みさこ

振付・ダンス

作・演出・映像

飯名尚人

●平成二十三年三月二十五日(金)午後七時半開演

第五回 初音館スタジオ

ダンス×音楽×映像「アジール」試演会

西松布咏

寺田みさこ

音楽

作・演出

映像

美紗の会

●平成二十三年四月九日(土)午後一時開演

赤坂・泉クラブ

第五回 純麗会のつどい

西松布咏

寺田みさこ

振付・ダンス

作・演出

映像

美紗の会

●平成二十三年五月六日(日)午後三時開演

岐阜・かわらや大広間

春風亭正朝

吉村 ゆかり

舞 嘴

●たより第67号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保朋子

デザイナー 近藤幹則

■ 純麗会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三一一二

電話 (三四四一) 一七一六

(五四四七) 一四一二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/